



自衛官候補生が初めての行進訓練



自衛隊静岡地方協力本部（本部長・宮川知己一等空佐）は5月9日（土）、東富士演習場（御殿場市・裾野市・小山町）で行われた第34普通科連隊自衛官候補生課程教育の行進訓練を取材した。

自衛隊に入隊して1カ月。迷彩ヘルメット、きつちりとアイロンをかけた迷彩服、ピカピカに磨き込まれたブーツに身を包んだ自衛官候補生たちは、災害等発生時に現場へ向かうことを想定し、各種装備品をはじめ衣類や食料などを詰め込んだ10キロを超える背のう（リュックサック）を背負い、小銃を抱えて15キロの行進に臨んだ。

スタート地点に整列した新隊員たちは、緊張で少し顔を強張らせつつも、30人ほどのグループで集まり円陣を組み、不安払拭も兼ねて「エイエイオー！」と腹の底から掛け声を掛け合い、士気を高めた。出発時刻になると、隊員同士5メートルの間隔を開けて行進を開始。ブーツでは足に当たるコンクリート張りの道、足を踏ん張らねばバランスを崩してしまうような岩や小石が転がる道、土煙が舞う戦車道などを、ただ黙々と進んでいく。前を見据えて歩く精悍な姿は、自衛隊での成長を感じさせた。

適宜設けられる休憩も訓練の一環。草むらや木々の間に隠れるように座り、身体に負担をかけないよう背のうのバランスを整えたり、靴や装具の点検を行う。そして昼食はパック飯、いわゆる「ミリめし」で、野外で同期と食べるミリめしもまた格別なようで、笑顔でほおぼっていた。

行進訓練に臨んだ富士市出身の隊員は「なだらかに見える演習場も、実際に歩いてみると思ったより高低差があり厳しかった。今後さらに身体を鍛え、知識や技術を身に付けていきたい」と今後の抱負を語ってくれた。

静岡地本は今後、精強い自衛官を目指す新入隊員の姿を追い、その成長を県民に広く知ってもらえる広報活動に努めていく。

自衛官候補生が防護マスクの性能を体験



自衛隊静岡地方協力本部（本部長・宮川知己一等空佐）は5月13日（水）、陸上自衛隊板妻駐屯地（御殿場市）において、第34普通科連隊自衛官候補生課程教育の「防護マスク装脱面訓練」を取材した。

この訓練は、有毒ガス等から身を守る防護マスクの性能を、身を持って体験するもの。教官からマスクの性能や取り扱いについて説明を受けた自衛官候補生たちは、この訓練が未知のものであることから、緊張した面持ちで一層の真剣さが伝わってきた。ガスを模した煙を閉じ込めるテント前に7人ずつの班ごと集合し、マスクを装着すると、それぞれ空気の漏れがないかなどを互いに入念に確認しあった。無事装着が完了すると、前方の班員の肩の上に両手を乗せ、一列になってテントの中へ。テント内はすでにガスを模した催涙線の煙が充満し、うっすらと霞がかかっている。テント中央で輪になって広がり、いよいよ教官からマスクを外すように指示がとんだ。勇気を奮い立たせてマスクを外した瞬間、目・鼻・口を襲う強烈な刺激に、一斉に声を上げる自衛官候補生たち。さらに、マスクの大切を身を持って感じるため、涙を流しながらも大きな声で歌を歌い、5分間、厳しくも重要な訓練をやり遂げた。

訓練を終えた自衛官候補生は「催涙線の煙は、倒れそうなど怖かった。初めて防護マスクを着けた時は少し息苦しく感じたけれど、実際にテント内で外してみても、その大切さが身に染みてわかった」と貴重な経験を語った。

静岡地本は、今後も新入隊員の頑張りや県民に伝え、自衛隊への理解を深めてもらえるよう努めていく。

自分や周りの人の命を助ける 救急法と止血法を学ぶ



自衛隊静岡地方協力本部（本部長・宮川知己一等空佐）は5月21日（木）、陸上自衛隊板妻駐屯地（御殿場市）で行われた、第34普通科連隊自衛官候補生課程教育の「救急法訓練」を取材した。

駐屯地内のグラウンドに集まった自衛官候補生たちは二つのグループに分かれ、事故や災害等発生時の迅速かつ適切な対応として、意識不明者発見時の救命法と、止血帯の使用方法を学んだ。

救命法では、意識不明者を発見したとの想定で、呼びかけや人形を使用した心臓マッサージ・人工呼吸を実践。患者の状態把握にはじまり、重要な協力者の確保要領など、冷静で的確な判断と躊躇しない行動力が問われることを身を持って学んだ。

一方、止血帯は、米軍などでも使用されているバンド状のもので、止血する箇所に装着でき、速やかに締め付けることが可能。慣れると片手でも扱うことができ、たとえ腕を負傷した場合でも自ら処置を行うことができる。

止血帯の実物を手にした自衛官候補生たちは、教官の指導のもと装着方法をしっかりと学び、特に「素早く、高い位置に、できる限りきつく締め付ける」という注意事項に気を付けながら、1分以内の装着完了を目指して何度も反復練習をしていた。

静岡地本は、今後も入隊者の成長を追い、家族をはじめ県民にも広く知ってもらえるよう、積極的な広報活動に努めていく。